

いつ
でも

No. 15 宇治十帖の地に 石塔や石仏などを訪ねる

自然

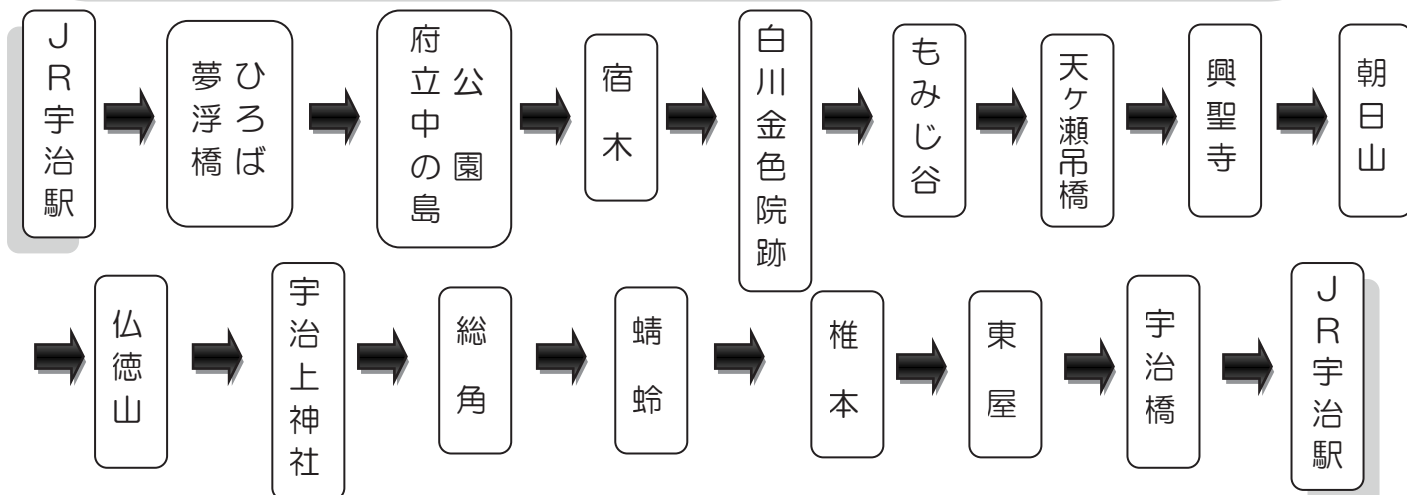
歴史

源氏物語

おすすめポイント

「思わぬ山にふみ惑うかな」と嘆じた薫君は、ここ夢浮橋からいかなる山に挑んだらうと中の島に歩を進める。日本最大といわれる十三重の石塔には、西方極楽浄土を拝するキリークの梵字・魚霊を鎮めようとした叡尊の努力を想い、後ろに映える山の緑と白い雲を仰ぎながら白川へ。寛子の供養塔は、藤原氏の栄華の跡をこの地でひっそりとみつめていたのか。

朝日観音、蜻蛉の阿弥陀三尊、東屋の観音さまを拝みながら、この巻で登場した「浮舟」の姿もまたまぼろしの像として、何処からか見守っているよう。



ここに注目



●中の島十三重石塔

高さ15mのわが国最大の石塔で、1286（弘安9）年西大寺の僧叡尊が朝廷の命により宇治橋の修復を行い殺生禁断の思想で魚霊の供養と宇治橋の安全を祈って建立した。



●東屋観音（東屋）

花崗岩に厚肉彫りされた聖観世音菩薩坐像。蓮華座に坐しその上に二重円光を負い、宝冠をつけ右手は施無畏印、左手は蓮華を捧げて結跏趺坐する。鎌倉時代後期の作品と考えられ、東屋観音と呼ばれ親しまれている。

